第４節　ま　　と　　め

中畑遺跡からは，縄文時代，古墳時代前・後期，平安時代，中世，近世の遺構と遺物が確認された。まとめとして特に，古墳時代前期の第１号方形周溝墓と第17号住居跡の特徴や，出土遺物を検討し，墓と住居の関連について考えてみたい。また，古墳時代後期の第８号住居跡から出土した手捏土器の出土状況を検討し，住居の廃絶行為について考えまとめとする。

1　古墳時代前期の方形周溝墓と集落

古墳時代前期以前では，弥生時代後期の土器片や紡錘車が，古墳時代前期以降の遺構に流れ込んで出土している。このような状況から，調査区域の周辺には古墳時代前期以前に弥生時代後期の集落が展開していた可能性が想定される。ここで古墳時代前期の方形周溝墓と集落について考えてみたい。

⑴　出土土器の様相

方形周溝墓と前期集落の変遷を検討するための前提作業として，土器の様相を検討する。ここでは，残存状態が比較的良く，複数の器種が出土している第11・17号住居跡と第１号方形周溝墓出土の土器を資料とする。

第11・17号住居跡，第１号方形周溝墓からは，弥生土器が伴出していない。第11・17号住居跡，第１号方形周溝墓出土土器は，椀・坩・脚付坩・器台・装飾器台・小型高坏・高坏・壺・甕である。

㈠　器台・坩　　器台は，小型器台・装飾器台（第17号住居跡　第45図－120）で，坩は小型丸底坩と考えられる。第11号住居跡からは，脚付坩が２個体出土している。

㈡　高坏　　脚部からすべてが東海地方の元屋敷系の高坏と考えられ，畿内系の柱状脚部の高坏は，出土していない。第17号住居跡からは，小型高坏も出土している。

㈢　壺　　口縁部は，四種類の形状がある。折り返し口縁のもの（第１号方形周溝墓　第49図－143），端部が丸く収束しているもの（第17号住居跡　第45図－125），横方向のナデによって端部が平らな面になっているもの（第17号住居跡　第45図－124・126），有段口縁のもの（第17号住居跡　第45図－127）である。

㈣　甕　　すべて厚みのある平底で，台付甕は出土していない。第１号方形周溝墓から出土した甕（第49図－144）も，底部が残っていないが，体部下半より上の残存部から平底甕と推測される。口縁部は，二種類の形状がある。端部が丸く収束しているもの（第11号住居跡　第31図－75，第32図－77，第17号住居跡　第46図－129～132・134・135，第１号方形周溝墓　第49図－144）と，横方向のナデによって口縁端部付近の外面が平らな面になっているもの（第11号住居跡　第32図－73・74）である。第49図－144の甕は，頸部の輪積み痕を消さずに残している。

以上の土器様相に，各遺構から出土した土器の器種構成を併せると，これらの土器群は，東海系の小型器台・高坏に，小型丸底坩が加わる段階のものと考えられる[1)]。

この段階の細分については，田中裕氏の甕を基軸とした編年[2)]に併せて考えてみる。田中氏は，頸部に輪積み痕跡を残す甕を古く考えている。第１号方形周溝墓出土の甕（第49図－144）がこれに該当し，この甕を伴出する本跡出土の土器群が，最も古い。第17号住居跡出土の土器群には，輪積み痕跡を残す甕が出土していないが，その他の器種の特徴から同じ時期と考えられ，第11号住居跡出土の土器群がこれらより新しいと考えられる。以上の土器群は，前述した田中氏の土器編年のⅡ期に該当し，第17号住居跡，第１号方形周溝墓出土土器群をⅡ－１期，第11号住居跡出土土器群をⅡ－２期と位置付けることができる。

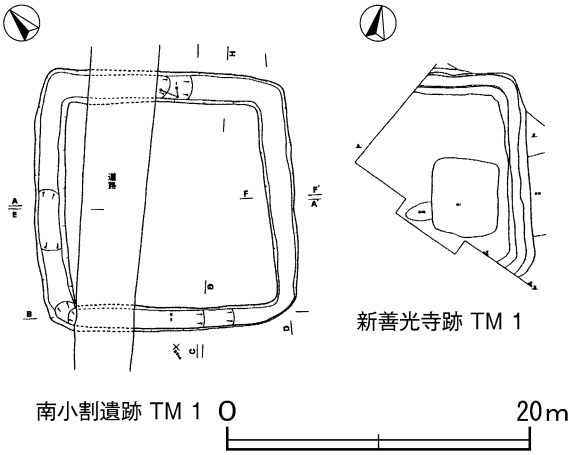
⑵　第１号方形周溝墓の検討

第１号方形周溝墓は，標高16.5mの河岸段丘中位面の高い位置に確認されている。確認面での平面形態は，四隅が全て切れており，伊藤敏行氏の形態分類のＡ１型[3]に相当する。方台部は方形を呈し，周溝の外縁中央部が外側に膨らんでおり，その周溝外縁を延長した線を結んだ平面形態は円形状である。規模は，東西の周溝外縁長で19.0m，方台部の東西長が15.0mである。

周溝の特徴としては，北側周溝の西端部は浅い平坦面が一段あり，そこからさらに周溝中央部に向かって深く掘り込まれて溝底になる。西側周溝は，周溝内周縁すべてに浅い平坦面が１ないし２段あり，そこから中央部に向かって不整な楕円形の土坑状に掘り込まれて溝底になる。

県内の方形周溝墓については，塩谷修氏が集成・検討されている[4)5)]。それによると，長辺の規模は10m前後に集中し，15m以上の大形のものは71例中４例と少ない。また，周溝の全周する伊藤氏のＤ１型がほとんどで，確実なＡ１型は報告されていない。塩谷氏の集成以後，涸沼川流域では，1994年，2004年に当財団で，南小割遺跡第１号方形周溝墓[6]と新善光寺跡第１・２号方形周溝墓[7]が調査されているが，Ｄ１型などで，Ａ１型とは異なる形状のものである（第246図　表26）。

第１号方形周溝墓の遺物の出土位置は，北側周溝の西端部と西側周溝の中央部にある土坑状の掘り込みにだけ集中し，出土層位は，すべて自然堆積層中である。第49図－138・139・141，DP22・DP23は，方台部側からの早い段階の流入土中から，第49図－140・142は周溝の外側からの遅い段階の流入土中，144は北側周溝の浅い平坦面の覆土下層からそれぞれ出土している。また，高坏（第49図－140）を見てみると，小破片が接合しほぼ完形に復元できることや，小破片の出土位置・層位や出土状況から流入したものではなく，周溝の埋没過程で投棄されたものと考えられる（表27）。



第246図　南小割遺跡，新善光寺跡の方形周溝墓

表26　涸沼川流域の前方後方墳・方形周溝墓一覧表

遺跡名	遺構番号	形態	規模（m）	穿孔・破砕土器			時期
				主体部	方台部	周溝	
中畑遺跡	TM1	Ａ１	19.0×(18.2)	－	－	破砕二次火熱	Ⅴ
	TM2	不明（確認された周溝の間は途切れている）	14.5×(5.3)	－	－	－	－
南小割遺跡	TM1	Ｄ１	17.2×17.1	－	－	無	Ⅴ
新善光寺跡	TM1	不明（確認された周溝の間は途切れていない）	(14.1)×(11.5)	－	－	穿孔２	Ⅴ
	TM2	不明（確認された周溝の間は途切れていない）	(5.9)×(1.8)	－	－	無	Ⅴ
髭釜３	SX1	Ｃ３	－	－	－	穿孔２	Ⅵ
	SX2	Ｄ２	25.8×23.4	－	－	－	－
	SX4	－	－	－	－	－	Ⅵ
小堤貝塚１	－	－	－	－	－	－	Ⅴ
宝塚古墳	－	－	39.3	－	－	－	前期古墳

※方形周溝墓の形態分類，時期は，山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社1996年12月に準拠し，各報告書から筆者があてはめたものである。また，髭釜遺跡，小堤貝塚は，『関東の方形周溝墓』に掲載されている「関東７都道府県周溝墓集成表」から転載したものである。

⑶　第17号住居跡の検討

第17号住居跡の形状は，主柱穴の位置から長方形と推測される。確認された同前期の住居跡は，すべて方形であり，形状に違いがみられる。また，焼土や炭化材が床面から確認され，床面出土の完形品が椀（第45図－113）だけである。床面出土の遺物が少ないことから，廃絶後すぐに土器類を屋外へ持ち出し，時間を空けずに焼却されたものと考えられる。

遺物の出土位置は，広い範囲に散らばっているが，かなり離れた位置でも破片間で接合関係が認められる。出土層位は，焼失時もしくは焼失後にすぐ埋め戻したと考えられる人為堆積層中で，貯蔵穴内からの出土破片と覆土下層からの出土破片に接合関係が認められる。また，焼成後の外面から内面に向かっての底部穿孔の壺が１点出土している（第45図－128）が，このような穿孔土器が出土しているのは本跡のみである。孔径は１㎝ほどで，孔の破断面は研磨されていない。さらに二次焼成痕も認められ，器面は剥落している。この穿孔土器は，本跡より新しい中世以降のピットによって撹乱を受けているため，原位置を保っていない。

表27　第17号住居跡・第１号方形周溝墓出土土器の接合破片数・残存率と二次火熱痕

遺構名称	遺物番号	接合破片数	残存率	二次火熱痕
SI 17	113	0	完形	○
SI 17	114	3	10%	○
SI 17	115	1	60%	○
SI 17	116	2	30%	○
SI 17	117	1	20%	○
SI 17	118	1	10%	○
SI 17	119	10	90%	○
SI 17	120	9	40%	○
SI 17	121	2	40%	－
SI 17	122	1	30%	○
SI 17	123	1	10%	○
SI 17	124	55	60%	○
SI 17	125	17	40%	○
SI 17	126	28	20%	○
SI 17	127	13	30%	○
SI 17	128	2	30%	○
SI 17	DP21	0	ほぼ完形	○
TM 1	138	5	20%	○
TM 1	139	4	10%	○
TM 1	140	17	90%	○
TM 1	141	7	40%	○
TM 1	142	5	15%	－
TM 1	143	1	５％	○
TM 1	145	1	40%	○
TM 1	DP22	1	完形	－
TM 1	DP23	1	完形	－

※観察対象は，報告書に掲載した椀・坩・器台・高坏・壺・ミニチュア土器・土玉である。
※二次火熱は，赤変・煤の付着が両方もしくは片方の痕跡を目安としており，器面が剥落しているものも含む。

⑷　方形周溝墓と集落の位置と関係

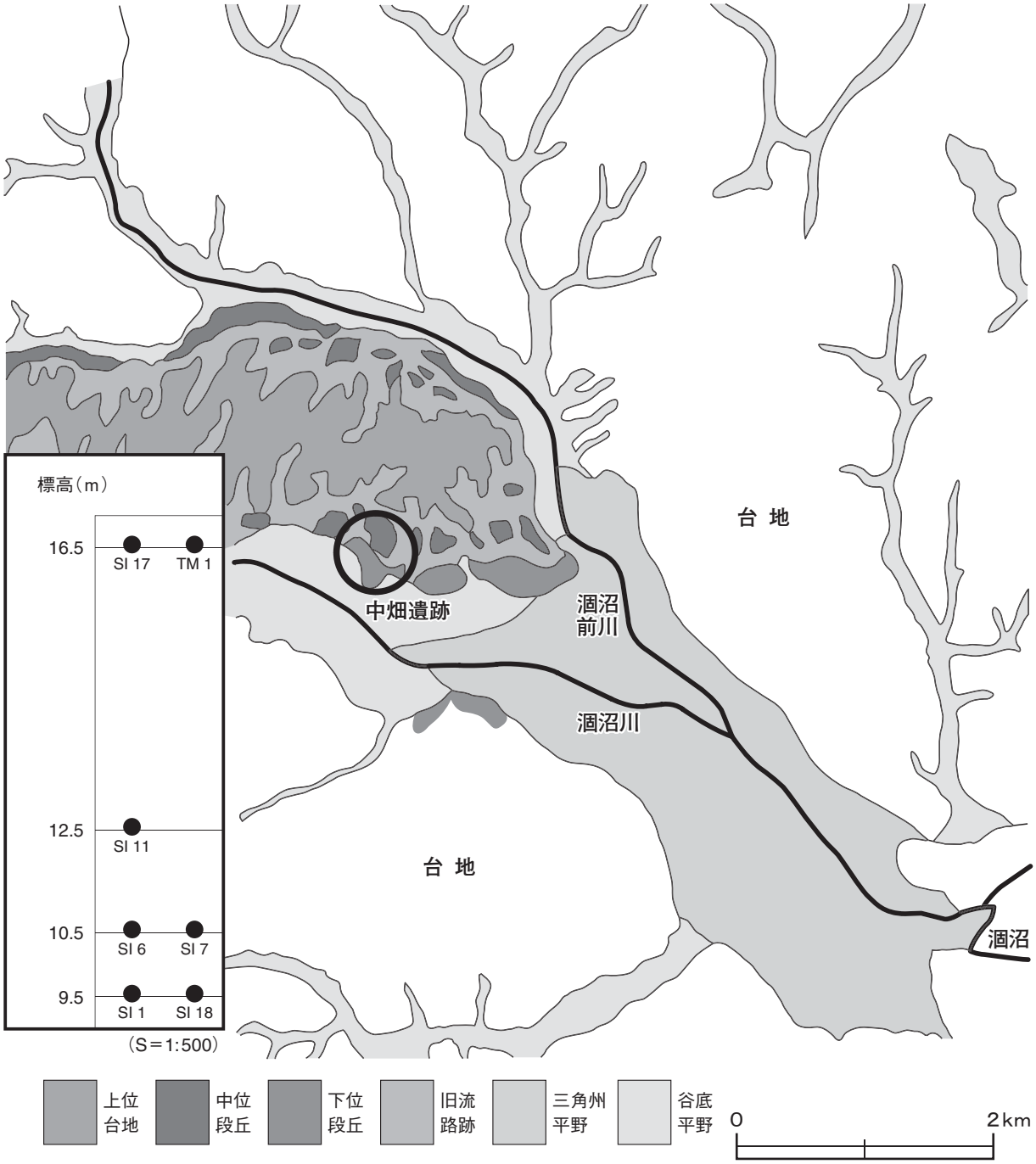
出土土器の時期と，遺構の構築・廃絶時期は違う場合がある。第１号方形周溝墓の築造時期は，Ⅱ－１期土器群が周溝の覆土中から投棄された状況で出土していることから，土器群の時期より古い。また，第17号住居跡出土のⅡ－１期土器群は，床面や廃絶後すぐに埋め戻したと考えられる人為堆積層中から投棄された状況で出土していることから，廃絶時期に伴うものと考えられる。同時期の土器の異なる出土状況から，第１号方形周溝墓は，第17号住居跡の廃絶以前に造られたものと考えられる。しかし，第17号住居跡と第１号方形周溝墓は，同時期の土器群が出土していることから，墓の築造以降，住居の構築から廃絶までの間に併行した時期があったことが推測される。

方形周溝墓と住居の占地を標高で見てみると，時期が併行していると推測される第１号方形周溝墓と第17号住居跡だけが，標高16.5mほどの河岸段丘中位面の高い位置に隣接している。これらより新しい第11号住居跡は，標高12.0mほどの位置に見られ，それ以外の前期住居跡は，すべて標高10.0mほどの河岸段丘の低位面に位置している（第247図）。

このような状況から，第１号方形周溝墓は標高の低い集落域から見えやすい，河岸段丘中位面の高い位

置に計画的に造られたと考えられる。また，方台部側から周溝に向かって流入した鹿沼パミスを含むローム土主体の土が溝底に堆積[8]していることや，主体部が確認されていないことから，県内のほとんどの方形周溝墓と同様に，墳丘が構築されていたと推測される[9]。このように墳丘の存在は，下方から見上げた時に視覚的に強く印象づけることができたと推測される。

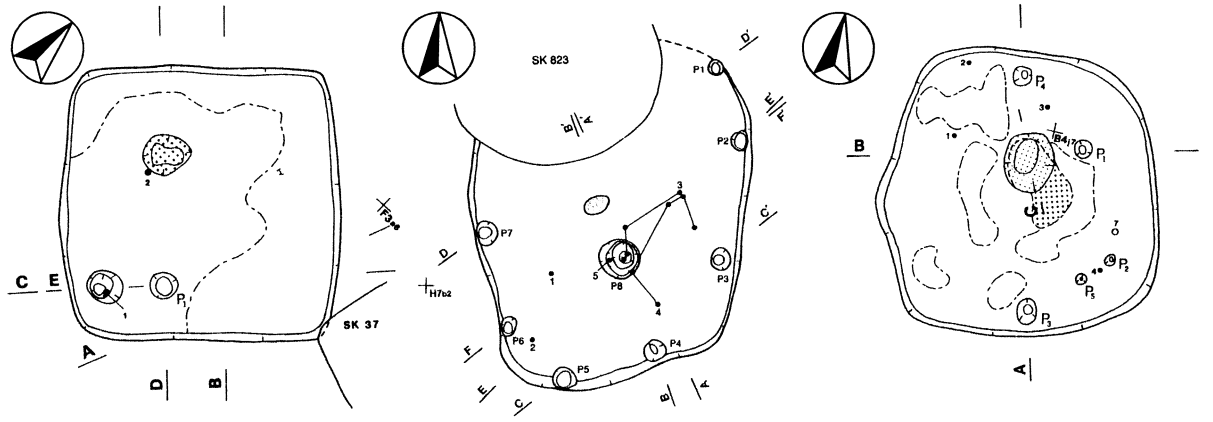
第17号住居跡は，第１号方形周溝墓と唯一同じ標高の位置に隣接している。第17号住居跡は，炉周辺の床面だけがやや硬化しているが，全体的に軟弱である。同様に床面が硬化していない住居跡は，小形で炉や柱穴がない第６号住居跡だけである。第６号住居跡と同様に，居住空間と考えるには使用痕跡が弱い第17号住居跡だけが，他と違った長方形の形状を取った可能性も考えられる。



第247図　地形区分図（土地分類基本調査「石岡」1981年より）と古墳時代前期の遺構垂直分布図

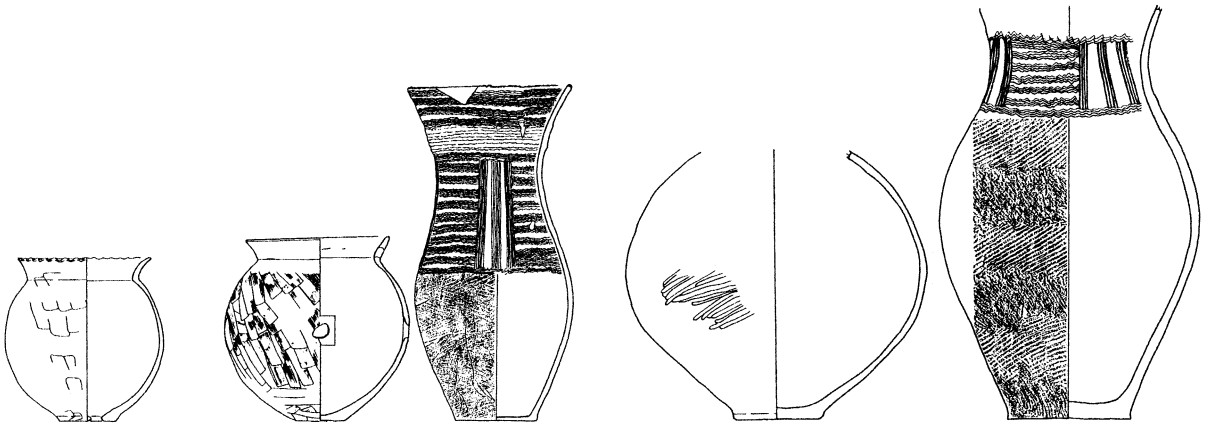
また，穿孔土器が方形周溝墓から出土せず，第17号住居跡から出土している。この穿孔土器は，中世以降のピットの撹乱を受けているため原位置が明らかでないが，器面が剥落するほどの二次焼成を受けていることから，火災時に住居内にあったものと考えられる。

涸沼川・涸沼前川流域で調査されている，弥生時代後期後半から古墳時代前期住居跡出土の穿孔土器の出土例は，古墳時代前期の南小割遺跡第39号住居跡[10]，弥生土器と土師器が共伴している宮後遺跡第103号住居跡[11]，石原遺跡第66号住居跡[12]の３軒から３個体が出土している（第248図　表28）。３遺跡の穿孔土器の出土状況をみてみると，南小割遺跡第39号住居跡の穿孔土器はほぼ完形で，人為堆積の貯蔵穴内覆土上層から出土している。宮後遺跡第103号住居跡の穿孔土器はほぼ完形で，人為堆積のピット内に埋められた状態で出土しており，埋設土器の可能性も考えられる。石原遺跡66号住居跡の穿孔土器は，口縁部が欠損して，床面から出土している。この住居跡は人為堆積で，床面に炭化材や焼土が確認されていることや，出土遺物の少なさから廃絶時の焼却と推測される。これらの穿孔土器が出土する住居跡は，遺跡内



1　南小割遺跡 SI 39　　2　宮後遺跡 SI 103　　3　石原遺跡 SI 66

0　2m



1－①　2－①　2－2　3－1　3－②

0　20cm

○の番号が穿孔・打ち欠き土器。上の遺跡番号と遺物番号は対応している。

第248図　涸沼川・涸沼前川流域の穿孔・打ち欠き土器出土住居跡（註２・27・28文献より）

表28　涸沼川・涸沼前川流域の穿孔土器出土の弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の住居跡

遺跡名	弥生土器と土師器が伴出している住居跡	古墳時代前期住居跡	穿孔・打ち欠き土器（住居跡出土）	穿孔・打ち欠き土器（方形周溝墓出土）	穿孔・打ち欠き土器出土住居の時期と特徴	穿孔・打ち欠き土器出土住居跡の形状と面積	住居跡の平均面積
中畑遺跡	無	6	１軒（SI17） １個体（壺の底部）	無	前期前半　炉・主柱穴あり　床面は全体的に軟弱で，炉のある西壁寄りが周囲と比べて硬化しているが，顕著な硬化ではない　人為堆積　北壁側の床面にだけ焼土・炭化材が分布　北西コーナー部付近の床面に炭化種子の塊が出土	［長方形］	31.2㎡
南小割遺跡	無	127	１軒（SI39） １個体（甕の底部） 残存率95%	無	古墳時代前期　炉あり　主柱穴なし　人為堆積の貯蔵欠内覆土上層出土　ミニチュア土器１点床面出土	方形　13.3㎡	25.5㎡
新善光寺跡	1	3	無	１基（TM１） ２個体（壺の底部）	－	－	－
奥谷遺跡	無	6	無	－	－	－	－
小鶴遺跡	無	無	無	－	－	－	－
石原遺跡	6	14	１軒（SI66） １個体（壺の底部） 残存率70%	－	弥生土器と土師器が共伴　炉あり　主柱穴なし　床面は部分的な硬化　体部穿孔土器は，体部中位に内側から穿孔	不整円形　13.7㎡	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半住居跡　23.9㎡ 古墳時代前期住居跡　23.9㎡
宮後遺跡	4	9	１軒（SI103） １個体（甕の体部） 残存率90%	－	弥生土器と土師器が共伴　炉あり　主柱穴なし　壁際にピットが配置　床面は硬化していない　人為堆積　体部穿孔土器は，Ｐ８に埋められている	楕円形　12.6㎡	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半住居跡　20.6㎡ 古墳時代前期住居跡　24.5㎡
大塚遺跡	12	25	無	－	－	－	－
木戸遺跡	無	無	無	－	－	－	－
綱山遺跡	無	無	無	－	－	－	－
大戸下郷遺跡	1	9	無	－	－	－	－

※面積算出対象住居跡数　中畑遺跡４　南小割遺跡97　宮後遺跡８　石原遺跡15
※中畑遺跡第17号住居跡は，中世の遺構に壊されているため面積を算出していない。

の平均住居面積と比較して小さい小形住居であり，主柱穴が確認されておらず，床面は硬化していないか，部分的な硬化しか認められないなど，一般的な住居と異なる特徴を有している。

第17号住居跡は，穿孔土器の出土状況の詳細な検討ができないため，穿孔土器からの十分な住居の性格の検討ができないが，本跡は，意図的に異なった形状をしている可能性があることや，床面が軟弱で使用痕跡が弱いことなど，前述した遺跡での穿孔土器出土住居跡と共通した特徴を有していることが指摘できる。このことから，第１号方形周溝墓と時間的に併行する第17号住居跡だけが，同じ標高に隣接して構築され，相互に密接な関係をもっていた建物と推測される。

2　古墳時代後期の住居廃絶時の様相－第８号住居跡を例に－

後期後半の第８号住居跡からは，手捏土器17個体出土している。この住居跡は，床面から炭化材，焼土が確認されており，手捏土器以外の床面出土の遺物が少ないことから焼却され，その後時間を空けずに埋め戻されたと考えられる。手捏土器は，竈脇の限定された範囲の床面と，人為堆積層からそれぞれ出土している。これら手捏土器の中には，臼の模倣と考えられるものもある。これらの手捏土器は，竈周辺からの出土頻度が高く，竈周辺で行われた農耕儀礼に関わる[13]遺物とが考えられる。また，手捏土器と共伴している土玉も，祭祀具としての性格が推測される[14]。

このような状況は，古墳時代後期後半の住居廃絶時，焼却・埋め戻しまでの過程の間で，五穀豊穣の祭祀行為が挙行された結果と想定される。